

嫌がらせの先にあるものは…2

【第零話 前編 愛／憎】

その日、俺は半年振りに横浜の街に帰ってきた。

太宰が姿を消してから四年、彼奴が隣に居ない事にはもう随分慣れはしたが、いい意味でも悪い意味でも彼奴を思い出さない日は一日もなく、そんな自分に嫌気がさしていた。そんな時、太宰を捕らえて地下に監禁している、という事実が突きつけられた。

俺はそれを聞き、居ても立つても居られなかった。この時の俺の感情は……、自分でもなんだかよく解らなかった。怒りと、憎悪と、悲しみと、苦しみと、妙な昂奮と、嬉しさと……。

嬉しい……？ 今更、んな事……。ああ、そうだ、憎たらしい太宰あいつに報復できる好機チャンスが来たんだから、それが嬉しいんだ。

そう自分に云い聞かせ、冷静になり、考えを巡らす。

あの太宰が……、この四年間消息が少しも掴めなかったあの太宰が、こんなにも簡単に捕まる筈が無え……。屹度きつと、何か裏がある。そうだ、俺はそれを確かめに行くんだ。

自分の今の少し釈然としない感情をそんな気持ちにすり替えて、俺は太宰の元へと向かった。

そして、漸く逢う事が叶った憎たらしい元相棒は、立った状態で両手を鎖に繋がれ、見慣れない明るい色の服を着て、ふたつの瞳で俺を見た。目が合った瞬間ドキリとさせられてしまった俺が、それを表に出さないように話し出すと、太宰は酷く厭そうな表情を見せた。愛おしげに目を細められたらどうしようかと思っていたが、そんな事はなくてホッとした。ホッとしているのに、何故か少し寂しいような……。

【第零話 後編 愛／愁】

今、私は、マフィアの小さな女の子に捕まり、地下に鎖で繋がれている。まあ、捕まったのは、目的が幾つかあったからなのだけれど……。

かなり見慣れた懐かしい風景だけれど、私自身が此処に囚われる日が来るなんて思ってもみなかった。

先刻、芥川君が来て恨みを込めて殴られたけど、そんなのは想定済みだったし、もう一人、そんな風にして来る人間がいる筈だった。

待ち人來たらず、か……。

その事に少し寂しい感情が頭裡、脳裏に彼の笑顔が浮かんだ。逢えるのを待ち侘びていた訳ではなかったのに、そんな顔が浮か

んでしまい、誰も居ないというのにゆっくりと首を横に振ってしまった。そして、気持ちを入れ替えるように深く呼吸をし、そろそろ頃合いかなと思いい、お暇しようとしたところに、ドアを開く音とともに逆も懐かしく愛おしい声が響いてきた。

ああ、なんとというタイミングだろうか……。

もう少し遅かったら……。

私の目の前に中也が居る。心は嬉しい気持ちでいっぱいだったが、私は、それを表には出さずに態と悪態を吐いた。そんな私に向けた中也の酷く怒った表情……、その瞳……、薄暗い中で僅かな灯りに照らされたその蒼が、堪らない。顔を見るのは、一度街中で見かけているから二年振りくらいだけれど、その私の大好きな表情を見るのは、四年振りだ。そして、中也は、少しも変わっていないように見えた。強いて云うなら……、少し小さくなったよ

【第一話 邂逅】

「なんで置いて行きやがった!？」

街で太宰を見かけた俺は、その襟首を掴んで引き寄せ、睨みつけるように云った。

「だって、君、寝ちゃったしい……、チビなのに重いから厭なん
だもの」

「あ？ 手前てまえを信じて俺はっ……!」

そこまで云って、一発殴る。

氣にくわねえ。

昔から氣にくわねえ奴だったが、ぜんっぜん変わってねえ!!

芥川と人虎ギルドが組合の長を倒してから数日が経っていた。

組合ギルドとの戦いさなかの最中、俺は此奴こいつと四年振りの再会を果たし、首領ボス

の命令で、あろう事か此奴と一夜限りのコンビ復活まで果たし、『汚濁』を使い面倒な敵をぶっ潰した。

その時、此奴に俺を拠点まで送り届けると云った筈はずののだが、此奴は俺を置いて行きやがった。

まあ……、信じた俺が莫迦バカだったんだが……。

殴った勢いで地面に転がった太宰は、ゆっくり立ち上がると、服の汚れを払った。

相変わらず包帯だらけのその軀からだは変わってなかったが、包帯をしていないその顔には、ふたつの瞳が当たり前のようにつけていて妙に腹が立つ。

明るい色の服を身に纏まとい此処ここにいる男は、俺の知ってる太宰より少し大人の雰囲気かみを醸し出している、俺の知らない太宰だった。そんな此奴を最初に見た時は、少し驚いた。まあ、中身は全くと